

# 20世紀アメリカ合衆国におけるペアダンス ——ピューリタンの禁欲主義がダンスフロアに与えた影響について——

長 野 太 郎

**要約** アメリカ合衆国における社交ダンス、とくにペアダンスの歴史には、つねにピューリタンの禁欲主義の問題が関わっていた。こうした禁欲主義は、マックス・ヴェーバーの言う資本主義の精神の根本にあり、人々の行動を内と外から統制してきた。つまり、労働の対極にあるものとしてダンスを遠ざける一方で、道徳的な観点からの糾弾もなされてきた。また同様に、人種、階層、ジェンダーなどの社会的変数が歴史状況に応じて交渉される、接触領域の存在も重要である。本稿では、もっとも米国的な社交ダンスが登場した1920年代に注目する。

**キーワード**：ペアダンス、禁欲主義、接触領域

## El baile de pareja en Estados Unidos en el siglo XX: sobre la influencia del ascetismo puritano en la pista de baile

NAGANO Taro

**Resumen** El ascetismo puritano ha estado presente en la historia del baile social en Estados Unidos, sobre todo en relación con el baile de pareja. Dicho ascetismo, elemento constitutivo fundamental del espíritu del capitalismo según Max Weber, ejerce control sobre los comportamientos de las personas desde dentro y desde fuera: por un lado, debido a la reprobación del baile como enemigo del trabajo y a la polémica moralizante por otro. Asimismo, otro factor a considerar es el de las zonas de contacto, que cambian según los momentos históricos, donde las diferentes variables sociales como la raza, la clase social o el género entran en juego. Se presta atención especial a los años 20 cuando los bailes modernos típicamente estadounidenses aparecieron.

**Palabras clave**: baile de pareja, ascetismo, zonas de contacto

## はじめに

本稿では、20世紀のアメリカ合衆国における社交ダンス<sup>1</sup>実践の特徴的側面を明らかにしていきたい。

近年米国では、社会史的観点から社交ダンスを取り上げた研究<sup>2</sup>が、次々に出版されている。なかでも網羅的な著作がジョルダーノの米国社交ダンス史研究2巻本である。(Giordano 2006ab) また、ノウルズの著作は、19世紀から20世紀初頭にかけてダンスフロアを一新したモダンダンス<sup>3</sup>登場の衝撃に焦点を当てている。(Knowles, 2009) ノウルズの著作とも問題意識を共有するジョルダーノ(2008)は、1920年代に登場したモダンダンス実践と宗教関係者のあつれきを取り上げている。

こうした著作が次々と登場する背景には、インターネット上に公開されたウェブサイト“An American Ballroom Companion (ABC)”<sup>4</sup>の存在がある。ABCは、米国議会図書館が様々なセクションに散らばる社交ダンス関係の文献をリストアップし、解説、スキャンデータや動画などの電子ファイルを加え、研究やダンス実践に役立てようという意図のもとに整備された。貴重本を含む膨大なコレクションをオンラインで読むことができるようになっている。

ABCのコレクションの中心は、様々な時代に合衆国内で参照されたダンスマニュアルである。ダンスマニュアルは、出版当時の標準的社交ダンス・レパトリー、踊り方、礼儀作法、ダンスパーティの開催方法などを知る手がかりを与えてくれる。さらに、関連文献も主題別に紹介され、その中には28点の反ダンス言説の出版物が含まれる<sup>5</sup>。

アメリカ合衆国の社交ダンスについて考えるにあたって、ピューリタンのな

<sup>1</sup> 本稿では、文字通り社交としてのダンスを指すものとし、競技ダンス (DanceSport) とは区別して考える。

<sup>2</sup> 本稿はこれらの書物から、米国の社交ダンスについての基本的情報を得るとともに、社会史についての視角も得ている。

<sup>3</sup> モダンダンス (modern dancing) とは、20世紀初頭に、非西洋的文化要素を取り入れながら、西洋社交ダンスのレパトリーに取り入れられた新種のダンスを指すこととする。

<sup>4</sup> <http://memory.loc.gov/ammem/dihtml/dihome.html>

<sup>5</sup> ダンスと社会をめぐる研究においては、旅行記や新聞記事と並んで、こうした書物をもっとも具体的な情報を提供してくれる。ダンスが社会的に有害だと主張するパンフレット類は、その主張を読者に納得させるために、ダンスが踊られる場所、状況、雰囲気などを活写する。もちろん、こうした史料には情報としての限界があるが、それでもダンスを取り巻く社会状況を知るには第一級の史料であることは間違いがない。

禁欲主義を手がかりとしていきたい。20世紀になって高度の資本主義経済を発達させたアメリカ合衆国が、いち早く大衆社会や大衆文化を成立させ、その後グローバル化を先導してきた事実だけがダンスの発展にとって重要なのではない。合衆国におけるペアダンス実践の歴史については、宗教が深く関与してきた事実を見落としてはならない<sup>6</sup>。後ほど検討するように、マックス・ヴェーバーの言う「資本主義の精神」は、天職としての経済活動追求と、ダンス、カードゲーム、飲酒などの現世的楽しみを対極的にとらえるピューリタンの禁欲主義と深いつながりがあった。

さらに、本稿では社会における接触領域の問題にも注意を払う。接触領域とは、ここでは異なった社会集団、文化、行動原理などが接触し、交渉し合う領域のこととしておきたい。ペアダンスは文字通りに二人の人間が身体的に接触する営みであるから、社会における接触領域の性質が、社会的倫理と個人の行動パターンの両面から働きかける。

本稿の射程は、アメリカ合衆国におけるペアダンス受容史をこうした外面的・内面的統制 (discipline) の観点からとらえ直し、その特性やパターンを明らかにすることである。

## 1. ピューリタンの禁欲主義の論理とダンスの否定

初期イギリス植民地の時代から20世紀初頭にかけて、アメリカ合衆国ではダンスがキリスト教徒の倫理に反するとして、しばしば教会関係者から糾弾された。聖職者によるダンス糾弾がとりわけ苛烈さを極めたのは、狂騒の20年代 (Roaring Twenties) と呼ばれた1920年代であった。この時代には、移民労働力を背景に米国社会が産業の飛躍的發展を遂げ、世界のメトロポリスにふさわしく芸術や文化が活況を呈すると同時に、禁酒法の成立に見られるような保守的色彩が強まった時期でもあった。

19世紀末から20世紀初頭にかけて米国で流行したアニマルダンス、タンゴ、マシーシェ、チャールストンなどのダンスは、男女の過度の接触や、性的暗示、西洋的美意識に反する「非文明的」動作を含むと見なされるなど、宗教的保守派からの強い反発を招いた。しかし、倫理的な反発がすべてではなかった。その心底には植民地時代から一貫して米国社会にひそむ、ピューリタンの禁欲主義にもとづくダンスそのものの否定があり、それがこの時代に勢いを強めた

<sup>6</sup> ここで言う宗教の関与とは、宗教関係者がダンス実践のあり方を倫理的に監督することであると同時に、宗教的な生活規制が個人の行動パターンを方向付けるということでもある。

と言える。

20世紀になって米国を世界の工場の地位に押し上げた経済的発展の要因には、「時は金なり」というベンジャミン・フランクリンの言葉に代表されるような、近代資本主義の精神があった。マックス・ヴェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1920）の中で、近代資本主義の精神と禁欲的プロテスタンティズムの関係について論じている。

ヴェーバーの言う「資本主義の精神」の特徴は、基本的に利潤追求に敵対的なキリスト教倫理の内側から生まれてきたところにある。利潤を追求し富を求めること自体はいつの時代にも世界中に存在した。しかし、近代資本主義の根源にあるのは、いわば惰性として利己的に利潤を求める伝統的エートスとは違った、ひたすらたゆまず、合理的な方法で利潤を追い求め続けることを強いるエートスである。

このようなエートス、すなわち「社会の倫理的雰囲気」<sup>7</sup>の誕生にはいくつかの段階があり、とくにプロテスタントの中でもカルヴィニズムの影響を受けた諸派、ピューリタンやバプテストなどにこれが典型的に現れた。第一の段階は、かつてカトリック教会の修道院で追求された世俗外的禁欲の姿勢が、個々の信者の生活をより厳格に規定する形で世俗内的禁欲に置き換えられることである。これはどちらも、積極的に行動する禁欲であり、単なる節制とは違う。ここに、神からの召命である「天職（Beruf）」の遂行が神の国に入ることを確実にするという発想が付け加わる。さらにカルヴィニズムにおいて、自己を律しながら合理的に利潤を追求する行為が天職を追求することの一環としてとらえられるようになる。この対極に置かれたのが、カードゲーム、飲酒、ダンスといった現世的快楽であった。ヴェーバーは次のように述べる。

遊技はただ合理的な目的、つまり、肉体の活動力が必要とする休養に、役立つものでなければならなかった。しかし、衝動の赴くままにこだわりなく生活を楽しむための手段であるばあいには、遊技は彼らにとって好ましいものではなく、単なる享楽の手段であったり、いやしくも勝負事に対する功名心とか粗野な本能や、あるいは非合理的な欲望を起こさせるようなばあいには、もちろん端的に排斥されるべきものだった。「貴族的な」遊技であれ、庶民が踊りや酒場に行くことであれ、職業労働や信仰を忘れさせるような衝動的な快楽は、ずばり合理的禁欲の敵とされたのだった。（ヴェーバー、1989、329頁）

<sup>7</sup> 大塚「訳者解説」『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、388頁。

このような世俗内的禁欲のエートスが強く支配するイギリス領北米植民地がアメリカ合衆国の母体となり、近代資本主義と宗教的道德律の共存する社会を築いたのであった。それゆえ、アメリカ合衆国におけるダンスは、商業主義や大衆化といったような、近代資本主義の帰結だけでなく、強い禁欲主義が刻印されている。

以下では、アメリカ合衆国における社交としてのペアダンスの歴史をたどり、こうしたピューリタンの禁欲主義のエートスが、時代ごとの接触領域の性質と関連しながら、その具体的実践に影響する仕方について考察する。

## 2. 植民地期から19世紀にかけての社交ダンス

社交ダンス (social dance) を、人々が楽しみのために行うものと考えるならば、初期の米国には先住民、ヨーロッパ人、アフリカ人奴隷それぞれの社交ダンスがあったはずである。しかし、今日の国民国家的観念で歴史を理解するならば、先住民のダンスやアフリカ人奴隷のダンスは、米国社会の周縁、または外部に位置し、米国の社交ダンスとは基本的にヨーロッパ起源のものであった。少なくとも、アフリカ系の人々のダンスが合衆国の社交ダンスに顕著な影響を及ぼすに至るには、次章で取り上げる1920年代まで待たねばならなかった。

### イギリス領北米植民地

イギリス人が北米大陸への定住植民地建設を実現するのは、スペイン人、ポルトガル人によるアメリカ植民地創設より100年以上後のことである。とくに、経済的収奪を目的としたスペインが、複雑な地形の大陸山岳部にいたるまで、広範囲に定住地を築き、中央集権的支配体制を敷いたのに対して、北部のイギリス植民地は、沿岸部における小規模な自給自足の農業経済が中心であった。北米大陸南部ではプランテーション経営が行われ、ヨーロッパ系住民と先住民、アフリカ人奴隷の隔離 (segregation) が社会構成の基本であった<sup>8</sup>。

ニューイングランドに入植したピューリタンたちは、踊ること自体は否定し

<sup>8</sup> 18世紀における北米植民地の人種間関係の変化について、遠藤泰生は次のように述べる。「先住民を相手に戦うばかりでなく、黒人奴隷を社会の内に抱えることで『白人』としての自己防衛的な自己像を構築せざるを得なくなったヴァージニアの入植者の間には、この後、人種主義が他の植民地にも増して堅固に根を下ろしていった。その結果、奴隷という財産を含めた巨万の富を有するプランターと白人貧農層が、経済的には不平等でありながら政治的には人種を絆に平等を語る、奇妙に至んだ植民地社会がそこには築かれていったのである。」遠藤、2005、30頁。

なかったものの、男女が一緒に行うダンスや、メイポール・ダンスのような異教的ダンス、飲食店でのダンスなどを禁止した。また、職業としてのダンス教師も歓迎されなかった。(Giordano, 2006a, pp. 42-47)

17世紀末のニューイングランド植民地において、マザー牧師父子が展開した反ダンス活動は注目に値する。父のインクリースはベアダンスが聖書の教えに反すると強く主張した。他方、息子のコットンは、英国の王政復古後に一般化した舞踏会の風習を強く攻撃し、ダンスは虚栄と怠惰の源泉だとした。この時代のニューイングランドで主に踊られていたダンスは、遊戯的色彩の強いイギリスのカントリーダンスであった<sup>9</sup>。(Giordano, 2006a, pp. 47-53)

### 植民地の発展と独立

18世紀にかけて北米植民地の富が増大するにつれ、富裕層は社会的ステータス誇示のために舞踏会を催すようになった。そうした舞踏会ではヨーロッパ、とくにフランス宮廷の社交ダンスが模範とされ、それにともない富裕な家庭では、ダンス教師について正しいダンスの作法を学ぶことが一般化した。(Giordano, 2006a, pp. 53-60) その一方で、1730年代から1740年代にかけて第一次大覚醒 (Great Awakening) と呼ばれる宗教再生運動が起き、ダンス学校や舞踏会などの虚栄や浪費の糾弾、安息日の尊重などが訴えられた。(Giordano, 2006a, pp. 110-116)

アメリカ独立革命の起こる18世紀後半、優雅で洗練され、抑制の利いた所作と複雑な技術を要するメヌエットを頂点とするベアダンスのヴァリエーションが、上流階層の舞踏会の主役であった<sup>10</sup>。社会階層を問わず踊られた中間的存在<sup>11</sup>がイギリスのカントリーダンスから派生したコントルダンス (Contredanse)、さらにそれを形式的に精緻にしたコティヨン (Cotillon)、カドリーユ (Quadrille) などであった。メヌエットが、振り付けというより、厳密な身体的所作を試される「見せる」社交ダンスだったのに対し、コントルダンス類は、様々なフォーメーションを大勢で共有する「参加する」社交ダンスだった。いずれにしても、これらを適切に踊るにはダンス教師の指導が不可欠であった。

独立によって、こうした社交ダンス文化に劇的な変化が生じたわけではな

<sup>9</sup> 初期の入植者がもたらしたイギリス風カントリーダンスは、アパラチア山中などで伝承され、20世紀に入ってアメリカ固有のフォークダンスとして注目されていくことになる。

<sup>10</sup> 中世以降の西洋におけるベアダンス発展史については、長野 (2013) で論じた。

<sup>11</sup> Manuel, 2009, p. 17.



い。ただ、かつてイギリス本国の王族の誕生日などに開催された公式の舞踏会が、大統領に敬意を表して開催され、身分よりも職業的地位や富にもとづいた招待状が送付されるようになった。(Giordano, 2006a, p. 116) ジョルダノー(2006a)によれば、初代ワシントン大統領はダンス好きで知られ、在任中には数多くの公式舞踏会が催されたが、敬虔なピューリタン家庭出身の第2代アダムス大統領のように、ダンスに全く無関心か、否定的見解を持つ大統領もいた。(Giordano, 2006a, pp. 72-80, 131)

### 南部社会と人種間関係

ヨーロッパ人による農業を基礎とした北部の開拓植民地と違い、南部では黒人奴隷労働力に依存した大規模なプランテーション農業が経営された。19世紀になると、鉄道や運河の敷設によって北部の農業や工業がさらに発展し、アイルランド人やドイツ人などの白人労働者が入ってきた。しかし、南部では奴隷貿易が禁止された後も黒人奴隷制が維持され、綿花、タバコ、砂糖、米の生産が続けられた。

こうした南部地域では、同じく黒人奴隷制プランテーションが行われたカリブ地域やブラジル北東部と同様に、異人種間の共存は自明のことだった。プランテーション主の邸宅を中心とする、近代奴隷制社会の自律的秩序においては、黒人奴隷が白人のために白人のダンス音楽を演奏し、場合によっては足りない踊り手を補うこともあった<sup>12</sup>。(Manuel, 2009, p. 22, 26, 35) こうした接触領域から、カリブ地域では異種混交的なクレオール音楽・ダンスのジャンルが誕生した。マニユエルはヨーロッパ起源のダンスのクレオール化プロセスについて、次のように述べている。

…多くのアフロ＝カリブ人は、奴隷制期もその後も、明らかにこうした(ヨーロッパ系のコントルダンスやカドリユのような)ダンスを踊ることで、白人の主人たちが保つ社会的地位のおこぼれにあずかり、いまだに(アフリカ的な)カレンダなどを踊っている遅れた新参者のアフリカ人同輩よりも上に行くことができると感じた。(Manuel, 2009, p. 37)

カリブや中南米の社会には、人種にもとづいた明確な序列関係が存在したが、決定的な断絶というよりも連続的濃淡の階梯をなしていた。それゆえ社会的

<sup>12</sup> そのほか、白人と黒人の音楽文化の接触領域としては、売春宿、軍楽隊などがあつた。

位は、人種だけでなく、文化や経済力にも左右された<sup>13</sup>。本来、文化・社会的にカリブ地域ときわめて似通った米国南部地域であったが、人種間関係における接触領域はより狭く、それは時代とともにさらにせばまっていった。とくに、南北戦争後、南部が北部の優位のもとにアメリカ合衆国の一地方として統合されていくにつれ、南部独自の社会的秩序の重要性は後退していった。そのため、米国では、白人のダンスと黒人のダンスという明確に異なったカテゴリーが生まれ、カリブ、中南米のようなクレオールの要素は僅少にとどまった。

南部の敗北後、WASP（白人・アングロサクソン・プロテスタント）市民を主流派とする社会構成が強化される一方で、アフリカ系アメリカ人の国内移民、それに並行する海外移民の増加にともなって、米国内の接触領域は広がった<sup>14</sup>。

### 社交ダンスの変遷

19世紀前半から半ばにかけての時期の社交ダンスにおける大きな変化は、ワルツやポルカのような、単独のカップルによる組んで踊るペアダンスの浸透である。コントロールダンスやコティヨンなどから派生した、複数のカップルによるグループダンスも健在であったが、都市を中心に、単独のカップルのペアダンスが一般化していく。

19世紀半ば以降、グループダンスに生じた変化には、二つの方向性があった。

一つめは、2列になって踊るコントロールダンスのヴァリエーション、ないしフォーメーションの増加で、それにとともなって、コーラー（caller）と呼ばれるグループリーダーが展開を指示するやり方が生まれた。伴奏する音楽家がそれをする場合もあった<sup>15</sup>。（Giordano, 2006a, pp. 287-290）

二つめは、2組のペア、ないしは4組のペアが四方に配置し、手の込んだフォーメーションをオムニバスの展開するコティリオン（Cotillion）タイプの発展で、途中でワルツやポルカのような別のダンスが挿入されることもあった<sup>16</sup>。

<sup>13</sup> マークス（2007）が強調するように、特定の奴隷制社会が他よりも寛容であるとするのは神話に過ぎず、人種間関係や文化の方向付けを行うのは地域の歴史のプロセスである。

<sup>14</sup> ダンス文化の多様化という観点では、フランス、スペイン、メキシコからの領土併合が重要である。とくに、ニューオーリーズ、旧メキシコ領には東部地域とは異なったクレオールのカテゴリーがあり、米国の人種隔離原則は不安定にさらされることになる。米国が南部と北部の市民戦争に突入した原因の一つには、新領土併合の結果起きた地域間の均衡の変化があった。

<sup>15</sup> コーラーによる指示出しはあまりエレガントとは見なされなかったものの、西部などのフロンティア地帯では一般化し、そうしたスタイルが米国的スタイルと見なされるようになっていく。

<sup>16</sup> コティリオンはクアドリール（Quadrille）、ランサーズ（Lancers）などの変種を生んだ。



(Giordano, 2006a, p. 165)

いずれの方向性も、男女の親密さを強調しない遊戯的側面の強化であり、禁欲主義とも折り合いの良いものであった。

19世紀後半には、南北戦争後アフリカ系アメリカ人の文化的影響力が間接的に高まる。白人が黒人をステレオタイプ化して描く、黒塗りのショーがミンストレルの舞台上で演じられるようになり、同じ舞台に立つ黒人芸人までが黒塗りを必要とされたほどであった<sup>17</sup>。(Giordano, 2006a, pp. 152-153)

それとは逆に、黒人が白人を模倣して生まれたと言われるジャンルが、ケーキウォーク (Cakewalk) である。富裕なプランテーション主たちの形式ばったダンスをパロディー化したとされ、ダンスと言うよりは、ユーモラスな練り歩きといったものであった<sup>18</sup>。(Giordano, 2006a, pp. 259-269)

### ラグタイムの登場

19世紀末から第一次世界大戦勃発までの時期は、ラグタイム (ragtime) 期と呼ばれ、ラグタイム、すなわち「ぼろぼろのテンポ」を意味する、シンコペーションの効いた音楽がダンス音楽として流行した。ラグタイムはジャンル名というよりも、こうしたアフリカ系アメリカ人風のフィーリングを表す言葉で、ノウルズ (2009) によれば次のようなものである。

基本的にヨーロッパの音楽的形式とアフリカのダンスリズムとシンコペーションの組み合わせから生まれた。ラグタイムの和音と調性の構造はマーチからも影響を受け、最初にミンストレル・ショーのケーキウォークや練り歩きに登場し、世紀の変わり目に軍隊隊が普及させた。ラグタイムは基本的なケーキウォークの行進とはシンコペーションの使用の点で異なっていた。低音を受け持つ手は一定した規則的なビートを保ち、メロディーがオフビートのアクセントを強調した。(Knowles, 2009, p. 82)

---

単純さが身上のイギリス風カンントリーダンスに対して、コティリオンのタイプは、パフォーマンス的色彩が強いのと、異種のダンスを掛け合わせた部分が特徴的であった。

<sup>17</sup> これは、模倣による戯画的パフォーマンスであったものの、ジャンルが生まれることにより黒人芸人たちがそこに独自の要素を持ち込む余地を生んだ点も無視できない。

<sup>18</sup> ケーキウォークも見世物として人気を博し、白人のパーティで黒人たちに競い合わせたり、19世紀末になると、白人たち自らがそれを真似て演じたりと、化かし合いならぬ、真似し合いの事態まで起きた。

ラグタイム音楽に合わせて踊られたダンスが、一連のアニマルダンスである。ターキートロット (Turkey Trot)、グリズリーベアー (Grizzly Bear)、バニーハグ (Bunny Hug) といったように、動物を模したたわいのないもので、次々に新しいものが生まれては消えていった。

ラグタイム期のダンスとしては、米国産のものだけでなく、ヨーロッパ経由でもたらされたタンゴ (Tango)、アパシュ (Apache)、マシーシェ (Maxixe) などのエキゾチック・ダンスも含まれた<sup>19</sup>。それぞれの特徴的な音楽とともに、異国のものであることが、自らを危険にさらすことなく、「情熱的」「官能的」「ワイルド」などといったイメージを楽しむことを可能にした。

### 3. モダンダンスの登場と社会的統制

ラグタイム期から1920年代のジャズエイジに登場した様々なダンスが、ヨーロッパの模倣ではない、米国的な「モダンダンス」として西洋の社交ダンス文化を刷新する。米国社会におけるモダンダンスは、移民、黒人、女性といったマイノリティの参加を可能としたが、その夾雑物を取り除き、エリート層、中間層に受け入れられる過程で、規律や健全さが強調されていく。

#### 3-1. 1920年代アメリカ合衆国における社交ダンス

第一次世界大戦後、1920年代のアメリカ合衆国では、人種的隔離原則は変わらなかったが、大戦前よりもアフリカ系アメリカ人音楽家やダンサーが日の目を浴びるようになった。また、より直接的にアフリカ系アメリカ人のダンススタイルに影響を受けた新しいダンスのシミィ (Shimmy)、チャールストン (Charleston)、ブラックボトム (Black Bottom) などが流行した<sup>20</sup>。20年代にこうした現象が起きたのは、文化面におけるヨーロッパ追従の後退、既成の価値観に反発する若者文化の登場、産業や交通の発達と大衆化、ブロードウェイにおける商業主義、移民たちの社会的同化欲求、など様々な要因がからみ合った

<sup>19</sup> タンゴはアルゼンチンのブエノスアイレス、アパシュはバリの下町、マシーシェはブラジルのリオデジャネイロに起源があるとされるが、ミンストレルやケークウォークを通じて生まれたラグタイムがアフリカ系アメリカ人の音楽そのものではなかったのと同様に、これらのダンスもヨーロッパで社交ダンスとして形式化されたものであった。

<sup>20</sup> これらのダンスは、音楽が黒人風アクセントを持つだけのラグタイムと違って、西洋の伝統的なダンス語法には存在しない、肩やひじ、ひざ、腰の黒人的動作を取り入れたものであった。

ものであった。(Giordano, 2008, pp. 1-8)

さらに1920年代は、米国社会で禁酒法が施行された意味でも注目に値する。禁酒法は戦時下の特別な気分の中で可決され、戦後の幻滅感の中で実施された。したがって、禁酒法の施行は、社会の道德遵守の気分を物語るというよりも、表向きの道德律の裏をかく、境界侵犯の舞台背景を提供した。マフィアに代表される酒類密売人が暗躍し、ブートレグ（酒の密造人）、スピークイージャー（非合法酒場）などが時代の風俗となった。

いわゆる「禁酒法」、合衆国憲法修正第18条の成立事情について、アレンの『オンリー・イエスタデイ』（1931）は次のように書いている。

合衆国の大戦参加は、禁酒指導者に大きなチャンスを与えることになった。絶対禁酒綱領に反対したはずの人々の注意は、戦争に奪われ、国家の存立の危機に際しては、アルコールの将来などは些細なことだと考えられた。(中略) 政府は、世論をすべてドイツ反対に変えた。一しかも、大きなビール業者や蒸留酒製造業者の多くはドイツ系であった。憲法修正第18条はその自然の表現だが、戦争はまたスパルタ式理想主義のムードをもたらした。すべてのものが、能率と生産と健康のために犠牲にされた。(アレン、1986年、250頁)

また、戦地におもむき、生命を危険にさらした若者たちの刹那主義と、その後の幻滅感、厳格な親世代の価値観を否定し、逸脱する方向に向かわせた。若い女性たちの一部もまた、戦地で家庭の束縛から自由になり、新しい生き方を模索した。1920年には女性の参政権も認められ、女性の社会進出が進んだ。こうした状況のなかで、女性の服装や化粧、振る舞いに新しい世相が映し出された。女性たちは髪を短く刈り上げ、スカートは短くなり、窮屈なコルセットを脱ぎ捨てた。屋根付き自動車が新たなプライバシー空間を生み、男性とともに飲酒、喫煙を行い、開けっぴろげにセックスを語ることがもてはやされた。(アレン、1986年、第五章)

1920年代のモダンダンスは、このように男女の接触領域が増大するなかで賑々しく踊られることになった。

人びとは、『ホバート・カレッジ・ヘラルド』紙の編集者が皮肉った“シンコペーション型抱擁”スタイルで、フォックストロットを踊った。踊っている男女のあいだには、もはや一インチのすき間もなく、まるでニカワで張りつけられたように、彼らは身体と身体、頬と頬をつけて踊って

いた。シンシナティの『カソリック・テレグラフ』紙は憤慨した調子で、次のように書きたてていた。「音楽は扇情的だし、抱き合って踊っている連中—女性はまるで半裸体である—はまったく下品である。その動作は礼を失っていて、家庭向けの新聞には書くことをはばかれるような代物である。こうしたダンスをするのに適当な店はあるが、そうした店は従来、法律によって禁止されていた、と言えれば充分であろう。」(アレ、1986年、88頁)

つまり、1910年代から20年代にかけて米国社会では、深刻な価値観の断絶が生まれ、ダンスについても、先立つ世代に反発する形での変化があらわれた。20年代とラグタイム期との違いは、開き直りと挑発的ムードにあった。そうであればこそ、中上流層の白人たちが、明らかに黒人的身体語法を含むダンスに熱中することが可能となったのである。

### 3-2. 社交ダンスへの批判的眼差し

#### 聖職者による糾弾

米国議会図書館コレクションABCの「反ダンス言説 (Antidance Literature)」のコーナーを一瞥するだけで、キリスト教倫理の観点からダンスに反対する議論が古くからあり、宗派や地域を問わなかったことがわかる。人々を説得することが主眼の、説教という文脈のなかで、新奇な視点の提出は必ずしも必要でなく、相互に参照され、お決まりの論拠とレトリックを持つ一連のテキストが集積されていった<sup>21</sup>。

たとえば、1921年にペンシルバニアのメルヴィン・C・ドラム牧師が出版し

<sup>21</sup> 教会によるダンス糾弾について、ジョルダノは次のように時代別特徴をまとめている。「1860年代においては、社交ダンスに対する一般的な反対論は、それが聖職者の多くが“邪悪”と見なす社会的娯楽であるということで、しばしばトランプ、ビリヤード、ギャンブル、劇場などとひとくくりにされた。1870年代の反ダンス言説は社交界のリッチでファッションナブルなダンスに向けられた。1880年ごろになると、焦点はダンスの人体に及ぼす悪影響に移った。1890年代になると聖職者たちは社交ダンスを倫理的に悪と見なすことについて意見が分かれていた。なぜならアメリカ合衆国の社交ダンスの多くが礼儀作法マニュアル通りにヴィクトリア調の形式的手続きを守っていたからである。それと同時に、アフリカ系アメリカ人その他の民族的影響にもとづく、ケークウォークやツーステップといった騒々しいダンスがヴィクトリア調のダンス伝統に挑戦してきた。それゆえ、世紀の変わり目から1920年代にいたるまで、多くの聖職者、道徳改革者、ダンス教師たちが厳しい糾弾を行ったのであった。」(Giordano, 2008, p. 54)

た説教集には、次のように、キリスト教的なレトリックとともにモダンダンスを糾弾する言葉が述べられていた。

ダンスは罪です。もう一度言いますが、それは敬虔な生活の死です。胸元の開いた服や、短いスカート、絹のストッキング、そして男女が親しげに交わることが敬虔さに結びつくでしょうか？ みなさん、私は喜びを信じる、時代遅れのおいぼれです。しかし聞いてください、あなた方の娘や息子がぐらついているのを見て、放っておくわけにはいかないのです！

([http://memory.loc.gov/cgi-bin/query/D?musdibib:12:./temp/~ammem\\_IHsp::](http://memory.loc.gov/cgi-bin/query/D?musdibib:12:./temp/~ammem_IHsp::) 以下は該当するページ数を示す。8頁)

牧師は親たちの良心に訴えかけ、刺激の強い引用を用いてダンスホールの様子を描写し、危機意識をあおった。

ダンスは道徳の死です。ダンスフロアのカップルを見てください。これはスタウ博士の書き記したものです。「ダンサーたちはしっかりと抱き合い、体を寄せ合っている。とても接近しているので、まるで体が一つであるかのように動く。彼女の胸は彼の肩にもたれかかり、顔は彼の方を向いている。むき出しの腕はほとんど彼の首の後ろまで届いている。彼女の胸は激しく波打ちながら彼の胸と向き合っている。相対して体からませながら回転する。彼女の両眼は彼の方を向いているが、何も見えていない。柔らかい音楽が部屋中に響き渡るが、その耳には聞こえていない。彼らは軽やかに進んで行く。彼の熱い吐息が彼女の髪にかかる。彼の唇はほとんど彼女の額に触れんばかりだ。彼のぼんやりとした両眼が彼女の方を眺める。彼女はうっとりとした表情を浮かべている。」みなさん、もしもこれが道徳の死でないとしたら、私は無力です。もしもこれが罪でないとしたら、私はあらゆる善を信じることができなくなるでしょう。(9頁)

ここまでは、目に映るダンスホールの風俗がキリスト教倫理にそぐわないという指摘でしかない。しかし、次の部分にはヴェーバーの指摘したプロテスタント的禁欲主義の勧めが、きわめて明快に述べられている。

私たちは神のもとへと歩んで行かなければなりません。われわれの心を

天国と、天上の物事へと向けねばなりません。そうすればこの世のことに構っている時間などないはずです。私たちは天国に照準と狙いを定めて神の恩寵を求めねばなりません。(中略)しかし、みなさん、このキリスト教徒の生活の計画において、ただ無為に待つのではなく、果たすべき義務と実行すべき仕事があります。私たちには、私たちの神、教会、共同体、そして世界に返すべきものがあります。キリスト教徒の計画は世界に広がります。「この世のあらゆる場所へと出かけてゆけ」、それがキリストの与えた命令でした。この計画において、私が思うに、モダンダンスに与えるべき場所も時間も存在しないのです。(12頁)

つまり、ダンスは時間の無駄であり、それよりも神から与えられた義務があるというのである。説教を聞いた人々の心の中には、憂慮すべきダンスホールから子供たちを守らなければならないという思いと、神への負債の支払いに邁進しなければならないという思いがよぎったことであろう。

#### フォードのフォークダンス・リヴァイバル

聖職者によるこうした呼びかけ以外にも、モダンダンスに反対し、ダンスフロアの健全化を別の形で押し進めようとする発想もあった。自動車の大量生産方式を開発した米国の企業家ヘンリー・フォード(1863-1947)は、アメリカ文化の行く末に対して深い憂慮を抱いていた。大量の移民労働者の流入によって変化を余儀なくされるアメリカ社会の一体性を守り、移民たちを「アメリカ化」する良き手段として、彼は、19世紀アメリカのフォークダンスに注目した。

1926年にフォードは、『「おはよう」—25年の眠りから覚め、古き良きダンスがヘンリー・フォード夫妻によって甦る』と題した書物を出版した。本の中では、クアドリール、ランサーズ、コントラダンス、ワルツ、ショティッシュ、かかとつま先ポルカ、ギャロップ、シシリアン・サークル、ヴァーソヴィエンス、ヴァージニア・リール、メヌエットなどの古風なダンスが取り上げられ、女性のエスコート、ダンスに誘う際の作法といったような、19世紀的マナーが強調された(Giordano, 2008, p. 86)。さらにフォードは、お膝元ミシガン州のディアボーンに、19世紀アメリカを再現したテーマパークを作り、地元の高校で体育の授業としてフォークダンスを教えることも提案した。

一地方に限定的な出来事であったとは言え、フォードのこうした活動は全米で注目され、ダンス教師協会の中にも、これに賛同するものが現れた。しかし、多忙なフォードに代わり実際の指導、普及にあたったラヴェットが、高校生たちにはあまり受けが良くなく、むしろ大人たちが「昔に返ってステップを



踏んで楽しむことだろう」と述べていることは、現場における反応をよく示している。さらに、宗教的に厳格な福音派教会とメソジスト教会の信者が多くを占める、件の高校の父母たちは、フレデリック・C・クランプリング牧師を通じて高校側に抗議を申し入れた。その理由は、流行のチャールストンであれ、フォードの推奨するフォークダンスであれ、社交ダンスを踊ることそのものが、キリスト教徒の道徳に反するというものであった (Giordano, 2008: 89-90)。

### 3-3. 社交ダンスから大衆向けビジネスへ

前節で見たようなモダンダンスに向けられた批判的眼差しに対して、職業的ダンサーやダンス教師たちも無関心ではいらなかった。階層、人種、民族間の接触領域が増大し、社会的流動性が高まるなか、いまや数百万人の人々が参入する社交ダンスは、大衆文化として地位を確立していくことになる。もはや社交ダンスは、エリート層の私邸やホテルの大広間で招待状とともに催されるだけでなく、大小のダンスホール、キャバレー、酒場など、様々な場所で踊られた。ニューヨークのような大都市では、劇場街ブロードウェイのように、社交ダンスを取り入れたミュージカルが上演され、ショーアップされた社交ダンスを踊るダンサーたちが人気を博した。舞台上で演じられたダンスが流行を形作り、模倣されるようになった。

#### カッスル・スタイル

第一次世界大戦以前のラグタイム期に活躍したカッスル夫妻は、活躍した時期は1911年から18年にかけてと短かったが、ポピュラー文化ではよくあるように、適切なタイミングで適切な場所にいたことが、成功のかぎとなった。

とくに、彼らは労働者階級起源のダンスを、社会上層に橋渡しする役割を担った。彼らは二人とも労働者階級の出自ではない。イギリスから移り住んだヴァーノンとニューヨーク郊外の中流家庭出身のアイリーンは、ブロードウェイの仕事が縁で知り合い、結婚した。ヴァーノンはコメディを持ち味とする芸人であったが、アイリーンとダンス・カップルを組むことで不朽の名声を手に入れた。きっかけはパリのレビューに出演した際、新奇なラグタイム・ダンスが注目され、評判を呼んだことであった。(Cook, 1998, p. 140)

一躍時代の寵児になったカッスル夫妻は<sup>22</sup>、辣腕興行師のプロデュースのも

<sup>22</sup> カッスル夫妻の成功物語については、フレッド・アステアとジンジャー・ロジャース

とに、劇場やキャバレーに出演し、ニューヨークにダンススタジオを構え、自分たちのダンススタイルを普及させるためのマニュアル『モダンダンスの踊り方 (Modern Dancing)』も出版した。この本の前書きには、ラグタイム・ダンスが社会の批判にさらされるなかで、カッスル・スタイルがどこに照準を合わせたかが、はっきりとあらわれている。

私たちの目的はダンスを高め、純化し、それを適切な光の下で人々に示すことです。それが実現できているとしたら、不適切だと言って反対されることもないと信じます。それどころか、道徳を気にかける人々も、ダンスがただ単に健康や精神を若返らせるだけでなく、若さと長寿を保ち、洗練、優雅さ、美を獲得する手段であるとする医療関係者の意見に賛同することでしょう。

([http://memory.loc.gov/cgi-bin/query/r?ammem/musdi:@field\(DOCID+@lit\(M2409\)\)](http://memory.loc.gov/cgi-bin/query/r?ammem/musdi:@field(DOCID+@lit(M2409))))

「ダンスを高め、純化する」(to uplift dancing, purify it) という表現に端的にあらわれているように、労働者階層や黒人ミュージシャンを連想させるモダンダンスを、中上流層の米国人、すなわち白人に受け入れ可能なように作り替えることが、カッスル夫妻に与えられた使命であった<sup>23</sup>。カッスル・スタイルは、徹底してラグタイム・ダンスの枝葉を切り落とし、西洋の美的伝統が許す範囲内まで持って行くものであった。(Cook, 1998, pp. 141-44) また健全さと規律を強調するカッスル・スタイルは、中流白人層にとって、ダンスの習得を通じてハイソサイエティへの参入が可能になるという幻想を生みだした。(Malnig, 2001, pp. 278-79)

## 社交ダンス業界の自主規制

主演の映画も作られ、よく知られているのでここでは詳細を記さない。ただ、アングロサクソン系の容姿、ともにほっそりとして性的な過剰を感じさせないこと、そして結婚した夫婦であることなどが中上流層の米国人に好印象を与えたことは指摘しておきたい。

<sup>23</sup> しかし、カッスル夫妻はダンスを踊るためにラグタイムを演奏する黒人楽団を必要としていた。Cookはカッスル夫妻とミュージシャンたちの両義的な関係について、「カッスル夫妻は、それを公然と認めたかどうかには関わらず、ジェイムズ・リーズ・ユーロップと彼のバンドマンたちに依存することによって彼らのダンスを完成させていた。こうして白人のアメリカと黒人のアメリカが新しい力関係に結び合わされたのであった」と述べている。(Cook, 1998, p. 146)

このように、時代の反ダンス感情と和解しながら、価値あるものとして社交ダンスを作り替えていこうとする姿勢は、1920年代におけるダンス教師たちにも共通していた。ブロードウェイの劇場が社交ダンスの流行を作ることに対して、1919年8月にニューヨークで開かれた全米ダンス教師協会の総会では、次のような声明が発せられた。

人々はステージで見たものを真似ることが良いことだと思込んでいます。われわれはこうしたボールルーム・ダンスに対して職業的な見地から禁令を発したいと考えています。こうした改革はダンスホール経営者まかせではどうにもならないので、立法関係者にゆだねるべきであり、すでに多くの都市でこうしたことが検討中です。社交ダンスのあらゆる局面に関わる法が成立する見通しですが、人々はダンス教師たちに対しても、真の改革に動くことを期待しています。(Giordano, 2008, p. 71に引用)

こうした自主規制は20年代を通じて議論され、実際に多くのダンスホールで、日曜日の営業禁止、深夜営業の禁止、未成年者の入場禁止などが定められただけでなく、アニマルダンス、チャールストン、ブラックボトム、シミーの禁止、さらには「パートナーと過度に親密な行動をとること」「6インチ(約15センチ)以上近づいて踊ること」「低俗でやかましいジャズ音楽」の禁止といったものまであった。(Giordano, 2008, p. 80)

しかし、ブロードウェイを通じて新しい刺激的なダンスが次々に登場し、人々がそれに熱中する動きに歯止めをかけることは難しく、またそれを無視することは、商業的にも不利益であった。人気が高まる一方のチャールストンは、カッスル・スタイル同様に、トーンダウンしてスタジオで教授された。「両脚が45度以上は体の軸から開かないようにし、体を反り返らせるかわりにまっすぐ立っていなければならない」(Giordano, 2008, p. 84に引用)といった例からも明らかのように、こうした作り替えは、アフリカ系アメリカ人のダンス語法を、ヨーロッパ的ダンス語法の中に回収しようとするものであった。

### アーサー・マレーのビジネス・モデル

1920年代には、アメリカの社交ダンスに徹底した商業主義を持ち込んだ人物、アーサー・マレー (Arthur Murray) のビジネスも開始された<sup>24</sup>。カッスル・

<sup>24</sup> その発想の新しさについて言えば、社交ダンスにおけるアーサー・マレーのビジネス・

スタジオで社交ダンスを学び、インストラクターもつとめたマレーは、1920年からメールオーダー・システムによる、社交ダンスの通信教育ビジネスを開始した。自ら作成したシラバスに沿って、いつでもどこでも、簡単なものから順を追って流行のダンスを学ぶことができるように工夫されていた<sup>25</sup>。こうした背景には、全米各地に伸びた鉄道線路沿いに、海外や国内からの移民を集めた中産階層居住地区が作られたことがあった。

このビジネスで成功を収め、気を良くしたマレーは、さらに1938年からはフランチャイズ制のダンススクール「アーサー・マレー・スタジオ」の経営に乗り出し、全米のみならず海外にまで広がる巨大なビジネスを確立する。健康な精神と肉体の獲得に役立ち、社会的上昇の夢を見せてくれる社交ダンスは、拡大する米国中間層の価値観と合致した。こうしてマレーは、アメリカ合衆国における社交ダンス実践に関して、個人としては右に出るものないほどの影響力を行使することになった。

## 社交ダンスの職業化

ラグタイム期からジャズエイジにかけて、マスメディアや交通網の発達とともに、情報伝達は加速し、人々のイマジネーションも対面的空間にとどまらなくなった。カッスル夫妻の成功のあり方も、アーサー・マレーのビジネスも、そしてまた、逆方向を向いていたにせよ、フォードのフォークダンス・リヴァイバルの試みも、様々なものが今、目の前に存在するものにとどまらず、メディア化されたものとなっていったことを表している。

本稿でここまで見てきた社交ダンスとは、対面性にもとづき、それであればこそ、倫理的監督の対象とされたり、新たな創造性が付け加わって発展を続けたりしてきたものであった。これ以降、社交ダンスはただの社交ダンスであることをやめ、「正しい社交ダンス」、「逸脱的な社交ダンス」、「古い社交ダンス」、

モデルは、自動車産業におけるフォード・システムに匹敵した。

<sup>25</sup> マクメインズ (2006) はマレーの通信教育の特徴と影響について、次のように述べている。「彼のレッスンは、網羅的でわかりやすい簡潔なインストラクション、テクニックを練習するための基礎的エクササイズ、プログラムに沿って次の段階に進み続けることを勧める励まし、そしてトレードマークであるマレーの足形一床に置いて踏むための紙でできたステップ練習具、からなっていた。マレーのダンス・プログラムは、シンプルさと、すべてのダンスが互いに似通っていること、そして基礎を学んでしまえば比較的容易に次々ダンスを学べること、がかなめであった。マレーのメールオーダー・ビジネスの成功は、全米中でボールルーム・ダンスのステップとテクニックを標準化させ、それと同時にそれぞれのダンスの性質やテクニックにおける大きな違いをなくし単純化した。」(Macmains, 2006, p. 74)

「われわれの社交ダンス」等、社交ダンスのあり得るべきイメージとの関係をめぐって存在することを余儀なくされるのである<sup>26</sup>。

それにともなって、社交ダンスはダンス教室、音楽産業、出版業、ラジオ、テレビ等のマスメディア、服飾産業、飲食業などを包含するビジネス領域に変貌を遂げる。そこでは、社交ダンスを教えたり、デモンストレーションを行ったり、イベントをプロデュースしたり、最新の情報を提供したり、などなどと、様々な職業人が登場してくる。踊る人々の間にも「プロのダンサー」と「アマチュアのダンサー」の区別が生じ、前者を後者の上に位置づける序列化が生まれてくる。

こうして社交ダンスは職業として、たゆまず努力し続ける対象、すなわち「天職」の一つに加わることになるのである。

## おわりに

本稿では、アメリカ合衆国における社交ダンスの歴史を、禁欲主義と接触領域という二つの概念を手がかりに読み解いた。時期としては、社交ダンスが社交のダンスとして機能していた1920年代までを対象とした。それ以降、社交ダンスはますます媒介された形で実践されるようになり、舞台やコンペティションが実践の中心を占めるようになっていくからである。

本稿でピューリタンの禁欲主義と呼んだものは、経済活動への専心と享楽的生活への戒めが表裏一体化したエートスである。第2章、第3章で検討したように、このエートスの影響は、はっきりと米国社交ダンス史に刻印されている。とくに聖職者や道徳主義者によるダンス糾弾はよく研究されている分野で、本稿もそうした著作に多くを負っている。しかし、先行研究に不足していた観点が、ヴェーバーのとらえるような禁欲主義のエートスである。これは、経済的合理主義との関連でダンスを考える道を開く。つまり、生活からダンスを遠ざけることと、ダンスを一生懸命に踊ることが、同じことの表と裏の関係であるという発想は、これまであまり指摘されてこなかったのではないだろうか。

接触領域の概念は、本稿において明確に定義されていない。ただ、禁欲主義に着目するだけでは、様々な時期におけるダイナミックな変化を理解し、説明することができない。強いて言えば、禁欲主義が幅を狭めるものなら、接触領域は幅を広げる余地というようにとらえている。いわばトランプでのシャッフ

---

<sup>26</sup> このことをマクメインズは「社交ダンスの表象 (Representations of social dance)」と呼んでいる。(Macmains, 2006)

20世紀アメリカ合衆国におけるペアダンス—ピューリタンの禁欲主義がダンスフロアに与えた影響について—  
のように、新しい組み合わせが生じなければ、社会は閉塞化する一方である。  
これについて考えていくことは今後の課題としたい。

この研究はそもそも、北米、カリブ、中南米を含むアメリカス、複数のアメリカの比較研究として構想された。2013年に「キリスト教とダンス」と題した論文を書いた際に、時間の不足で扱うことのできなかったテーマが、北米とラテンアメリカのダンス文化の比較である。たとえば、キューバでバイラドル (bailador)、アルゼンチンでミロンゲーロ (milonguero) と呼ばれる、職業的でない市井の踊り手のカテゴリーがあり、なぜ一種の尊敬をもって語られるのか、そして、なぜそこにわれわれは驚きを感じるのか、といったことである。

また、上記研究で本来は重要な手がかりを提供するはずであった、ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』も同様であった。本稿もまた、時間の不足から、アメリカ合衆国の事例研究にとどまってしまったが、難解なヴェーバーの著作を、不十分ではあるにせよ、消化吸收し、応用することはできたと思う。

## 参照文献

- アレン、F・L『オンリー・イエスタデイ—1920年代・アメリカ』藤久ミネ訳、筑摩書房、1986年。
- Cook, Susan C. “Passionless Dancing and Passionate Reform: Respectability, Modernism and the Social Dancing of Irene and Vernon Castle”, in *The Passion of Music and Dance: Body, Gender and Sexuality*, edited by William Washabaugh, Oxford & New York: Berg, 1998, pp. 133–150.
- 遠藤泰生「概説」『資料で読むアメリカ文化史①植民地時代（15世紀末—1770年代）』、遠藤泰生編、東京大学出版会、2005年、13–44頁。
- Giordano, Ralph G. *Social Dancing in America, vol. 1: Fair Terpsichore to the Ghost Dance, 1607–1900*. Westport, CT: Greenwood, 2006a.
- . *Social Dancing in America, vol. 2: Lindy Hop to Hip Hop, 1901–2000*. Westport, CT: Greenwood, 2006b.
- . *Satan in the Dance Hall: Rev. John Roach Straton, Social Dancing and Morality in 1920s New York City*. Lanham, MD: Scarecrow Press, 2008.
- Knowles, Mark. *The Wicked Waltz and Other Scandalous Dances: Outrage at Couple Dancing in the 19th and Early 20th Centuries*. Jefferson, NC, and London: MacFarland, 2009.
- Macmains, Juliet. *Glamour Addiction: Inside the American Ballroom Dance Industry*. Middletown, CT: Wesleyan University Press, 2006.
- Malnig, Julie. “Two-stepping to Glory: Social Dance and the Rhetoric of Social Mobility,” in



*Moving History/ Dancing Cultures*, Middletown, CT: Wesleyan University Press, 2001, pp. 271-287.

Manuel, Peter. "Introduction: Contradance and Quadrille Culture in the Caribbean", in *Creolizing Contradance in the Caribbean*, edited by Peter Manuel, Philadelphia, PA: Temple University Press, 2009, pp. 1-50.

マークス、アンソニー・W 『黒人差別と国民国家：アメリカ・南アフリカ・ブラジル』  
富野他訳、春風社、2007年。

長野太郎 「キリスト教とダンス—西洋におけるペアダンスの発展をめぐる予備的考察」  
『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』（第21巻、平成25年）、117-141頁。

ヴェーバー、マックス 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、  
岩波文庫、1989年。